

渚滑川河川整備計画検討会（第3回）議事要旨

■日時：令和5年11月7日（火）15:00～17:00

■開催場所：ホテルオホーツクパレス紋別（WEB開催併用）

■出席者：（会場参加）渡邊委員長、根本副委員長、久保委員、長坂委員、
（WEB）笹木委員、塩本委員、吉川委員（以上7名）

※委員長、副委員長以降の順は五十音順

- 議題
1. 渚滑川河川整備計画検討会について
 2. 渚滑川流域の現状と課題
 3. 渚滑川水系河川整備計画の点検のポイント

■議事要旨

議事に入る前に、委員長の選出を行い、根本委員から渡邊委員が推薦され承認された。
また、副委員長は、渡邊委員長から根本委員が指名された。

1. 渚滑川河川整備計画検討会について

- ・ 特段意見なし。

2. 渚滑川流域の現状と課題

- ・ 気候変動や温暖化については、2℃上昇による影響に基づいて対応していくとの理解で間違いないか確認したい。（委員）
→そのとおりです。（事務局）
- ・ 温暖化の影響によって淡水である河川の流量が変化した場合、流出先である沿岸域への影響について、沿岸域の委員会などと情報交換する予定はあるか。（委員）
→今後、そのような情報交換の場があれば、情報提供していきたいと考えている。（事務局）
- ・ 治水上の課題として本川の整備は進んでおり安全度は向上しているが、一方で支川において氾濫したり、本川から支川に洪水が逆流する問題を抱える河川がある。渚滑川には河口には渚滑古川が合流しており、その上流ではウツツ川が合流しているが、このような支川において過去に洪水被害は発生しているのか確認したい。（委員）
→平成10年洪水において、渚滑古川で内水氾濫が発生した実績がある。（事務局）

- ・ 冬期間に流量観測やレジャーなどで川に立ち入る場面があると思うが、治水対策としてアイスジャム発生に関わる事前予測を河川整備計画に盛り込む予定はあるか確認したい。(委員)

→アイスジャムについては、現状巡視等で状況を把握するなどの対応をしている。今後とも、モニタリングしながら対応することを想定している。(事務局)
- ・ ケショウヤナギは観光資源になる貴重なものとする。ケショウヤナギは河道内に生育し、河川管理者が守るものという認識で良いか。(委員)

→渚滑川の河道内のみならず、周辺の古川などでも確認されている。網走開発建設部が管理する渚滑川の河道内に生育しているものは河川管理者が保全する。(事務局)
- ・ ケショウヤナギは、20年に1回程度の規模の洪水でできた比高が高い氾濫原で種が発芽し更新される。小規模な洪水による比高が低い氾濫原であれば他のヤナギが優占して定着してしまう。平成10年洪水で攪乱された箇所には、25年くらいたった立派なケショウヤナギ林ができています。洪水の攪乱が変わらないのであれば基本的に再生するので、自然に任せても良いと考える。(委員)
- ・ 平成10年洪水後に定着したケショウヤナギは、資料に示されている平成14以降に確認されている若木だと思われる。ケショウヤナギの全体量が減っている状況は気になることである。成熟林と若木林が砂州ごとなくなっていると生育場が減っていることになるため、その点は不安材料としてある。(委員)
- ・ ケショウヤナギの若齢林が減っていると資料にある。平成10年洪水では攪乱しその後若齢林が成長している。一方で平成28年洪水では、洪水の影響による変化が見られるが大きな問題ではないとのコメントの記載がある。洪水の影響を受けて攪乱と言う意味は負の影響とも捉えられるし、安定化といういい意味で捉えられることもできる。渚滑川でターゲットの生物としてケショウヤナギを対象とするのであれば、そういった点も踏まえて検討した方がよいと考える。(委員長)

→整理して次回報告したい。
- ・ ケショウヤナギにとって礫河原が重要とのことであるが、礫河原が減少した理由はなにか。これまでの河川整備との関連性はあるのか。ケショウヤナギの分布として上流は維持されていて、下流は減っているといったことは把握しているのか。(委員)

→河川整備は下流の掘削工事を実施しているが、ケショウヤナギが生息している中上流においては掘削工事を実施していない。河川整備との関連性はあまり大きくないと考えている。ケショウヤナギの分布状況は把握している。(事務局)

- ・ カワシンジュガイは貴重な生き物である。急流で砂礫の移動が激しい大きな川で生息しているのはまれで、支川で見つかったものなのか教えていただきたい。また、個体サイズから再生産しているかどうかを教えていただきたい。(委員)
 →整理して次回報告したい。(事務局)
 - ・ 流域治水におけるあらゆる関係者というのはどういう人か。(委員)
 →流域の自治体、森林関係、北海道、民間など、流域内の関係する機関のことを指している。(事務局)
 - ・ 地域の賑わいという観点から考えると、ケショウヤナギが渚滑川に生育していることを地域住民も含めて知らない人が多いと思われるため、住民がケショウヤナギ保全の取り組みに関わって知ってもらうことで、地域の賑わいに繋がっていくものとする。(委員)
3. 渚滑川水系河川整備計画の点検のポイント
- ・ 気候変動を踏まえた河川整備計画を策定していくことになるが、沿川に住む人々の命・財産・生業をいかに守るかを計画に反映していただきたい。(副委員長)
 - ・ 現河川整備計画を平成22年に策定後、13年の年月が経過しているが、全体の課題の捉え方として、渚滑町や上渚滑町の人口や年齢構成の変化、要配慮者利用施設の状況を踏まえて考える必要がある。河川から氾濫しないことが絶対条件であるが、万が一氾濫した場合に逃げられる計画の策定が重要と考える。(副委員長)
 →整理して次回報告したい。(事務局)
 - ・ リスクの変化は、渚滑町に着目した資料を提示されているが、上渚滑町に着目した資料も提示していただきたい。(副委員長)
 →整理して次回報告したい。(事務局)
 - ・ 今後、2℃上昇による影響を踏まえて計画を立てると思うが、資料 P37・38 には 4℃上昇した場合のリスクも示されている。2℃上昇と 4 度上昇を両方示し、今回は 2℃上昇のケースを対象とするという説明だとわかりやすい。(副委員長)
 →整理して次回報告したい。(事務局)
 - ・ 渚滑川は急勾配な河川であり、氾濫した場合の浸水時間は短いということによいのか。(副委員長)

→流域の特徴として、急勾配なので浸水時間は短くなる。上流で氾濫すると下流の渚滑町付近まで氾濫流が短時間で達するおそれがある。(事務局)

- ・ 渚滑川は急流河川で氾濫流の流れが強い。地域の特徴として、避難ルートが国道のみの地域であるため、氾濫流に関わる情報があったほうが避難行動を考えるにあたって参考になると考える。(委員長)

- ・ 河川整備計画の目標を2℃上昇による影響とする根拠は何か。(委員)

→国ではパリ協定に基づく2℃上昇より抑えることを目標としているところである。法定計画である河川整備計画において、ハード整備の目標としては2℃上昇を対象としているところである。一方で、危機管理や防災面では4℃上昇による影響も踏まえるということで両方掲載している。(事務局)

- ・ 2℃上昇はいつを基準にしているのか。(委員)

→パリ協定では産業革命以降としており、1850年を基準年としている。(事務局)

- ・ 資料P.38を見ると、2℃上昇・4℃上昇しても被害の大小はあるが、例えば避難困難地域を比べると、同じ地域の人が避難しなければならない。2℃上昇を目標とする意味があまりなく、4℃上昇の影響を踏まえた計画としても良いと個人的に考えている。目標を2℃上昇に基づくことが国の考えであることは理解した。(委員)

- ・ 笹木委員の御意見も踏まえて、2℃上昇、4℃上昇の河川整備計画への記述方法について検討する必要がある。(委員長)

→整理して次回報告したい。(事務局)

- ・ 資料P.38に示されている被害想定は渚滑川右岸の市街地に集中している。河川整備計画ではこのような状態にならないようにすることを目標に計画を策定するものと認識しているが、今後、万が一氾濫した場合の対応について検討する予定はあるのか確認したい。また、渚滑古川は渚滑川と樋門で縁切りされているとの説明があったが、市街地で内水氾濫した場合の水の行き場をどうするかが問題になると考える。このような問題について流域治水協議会で議論されているか。それとも本河川整備計画に氾濫時の対応を盛り込むのか考え方を確認したい。(委員)

→流域治水協議会において、我々河川管理者が所有しているリスク情報を自治体に示し、避難の仕方などを自治体に検討していただくことになると考えている。河川整備については河川整備計画に位置づけそれに基づいて進める。流域治水の取組は、避難やソフト対策も含めて流域治水協議会で議論し実施していくこととなる。(事務局)

- ・ 内水氾濫に対して河川管理者が内水対策を実施する場合もあると考えるが、今回 2°C 上昇時の内水対策はどのように扱うのか確認したい。(委員長)

→今後、2°C 上昇した時の内水による浸水範囲の検討を進め、それを自治体に提供して流域治水協議会で議論していくことになると考えている。(事務局)
- ・ 資料 P. 45 で降雨量という表記があるが、降水量としていないのはなぜか。(委員)

→洪水は主に夏季に発生し雪については考慮していないため、降雨量という表記としている。(事務局)
- ・ 資料 P. 46 の「河川整備の考え方」に記載されている「水産業等地域産業の発展の両立」の文言は河川整備計画に是非記載していただきたい。(委員)

→整理して次回報告したい。(事務局)
- ・ 資料 P. 46 に「共生」という言葉があったが、私は国際交流に関わっており、国際交流では「多文化共生」と言っている。物事を起こして交流していくというよりも、既にそこにあるという考え方である。これから温暖化になる。雨の量が増えるということに対してどのように生きていくか。自然と共生していくかということが気になっている。この地域は一次産業が多いため、次世代を担う子供たちが親の後を継ごうか、家業を継いでこの地域に住み続けるか、悩んでいる学生はとても多い。将来、安全で安心に幸せに過ごしてこの場に居続けるのか。それとも地域から出ていくのか。地域から出て行ける子もいるが、出て行けない子もいるため、そのような子はどうやって共生していくのかを常に考えている。(委員)
- ・ 国際交流では外国人をきっかけに地元の人が自分たちのことを考えてほしいと思っている。観光でも他の地域からいろいろな人が来るため、観光客が自分たちのことを見直すきっかけになればいいと考えている。(委員)
- ・ ハード面、ソフト面の両方を同じ人がやっていくのはとても大変なことであり、国際交流でもそれぞれの垣根を越えることは難しく、何となく溝がある。自分たちで全部やりきれないので、ハード面、ソフト面それぞれやっている人の架け橋になる人が大切になる。(委員)
- ・ ハードとソフトの垣根を越えて意見を出し合うのは重要な視点と考える。(委員長)
- ・ 資料 P. 46 の「コンセプト」と「考え方」はどういう関係性になっているのか。コンセプトには観光のキーワードがあるが、考え方では触れられていない。また、紋別市だけの安全・安心の確保でよいのか。どのように理解すればいいでしょうか。(委員)

→観光面では、考え方に自然環境のケシヨウヤナギを記載しており、ケシヨウヤナギを観光の目玉として取り扱えないか考えている。リスクの高い紋別市については、今回の

河川整備計画の対象区間に紋別市があるため、ピックアップして記載している。一方で、流域治水協議会では、上流の滝上町も含めて流域全体で安全・安心の確保を考えていく。
(事務局)

- ・ 渚滑川は流下断面を確保して河畔林も許容できていることが素晴らしい。グリーンインフラのとりくみとして、氾濫を許容できるエリアを増やせれば、本来あったケシヨウヤナギが自然再生する場所が確保できると考える。(委員)
- ・ 平成 22 年の現行整備計画策定時におけるパブリックコメントの内容を確認したい。(副委員長)
→整理して次回報告したい。(事務局)
- ・ 流域治水協議会から河川整備計画に求められていることはあるのか。(副委員長)
→流域治水協議会では、河川整備計画の変更について、今後の検討状況を踏まえて情報共有することを考えている。(事務局)
- ・ 原案には流域治水協議会と意見交換していくといった文言は入るのか。(委員長)
→整理して次回報告したい。(事務局)

以上